

# 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究

岡林 尚子・生和 秀敏

広島大学総合科学部人間行動研究講座  
(1991年10月31日受理)

## A study on the reliability and validity of Leary's social anxiety scale

Naoko OKABAYASHI and Hidetoshi SEIWA

### Abstract

The Interaction and Audience Anxiousness Scale (I-AA scale) drawn up by Leary is a measure of subjective social anxiety. This is a 27-item scale that is composed of two sub-scales, interaction anxiety scale and audience anxiety scale. Leary has hypothesized that higher interaction anxiety could be observed in the condition of contingent social setting and audience anxiety might be sensitive in the condition of no contingent situation.

The purpose of this study was to examine the factorial structure of I-AA scale. This five point scale questionnaire was administered to 405 university students, and analyzed by factor analysis and item selection. Three different factors were extracted against our expectation that Leary's scale might be constructed by two factors. Each factor was regarded as interaction anxiety factor (F-1), ill-fitting factor on Leary's hypothesis (F-2) and audience anxiety factor (F-3). From this result, we proposed to restructure Leary's social anxiety scale in order to assess more precisely the two different aspects on social anxiety. The short form scale (revised I-AA scale) consisting of 14 items was finally constructed by means of item selection. The factorial validity and reliability of the scale were confirmed.

### <序 論>

我々は日常生活において様々な対象や出来事に対して不安を経験する。中でも「スピーチ不安」「あがり」「困惑」「シャイネス」等の用語で扱われているような、対人場面で感じる不安や懸念は、他者との相互関係に依存する現代社会では避けられない身近な感情といえる。

Schlenker & Leary (1982) は、この対人不安を「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義している。対人場面では、他者との相互交流を通じて常に互いの印象が形成される。Leary (1983b) は、そうした印象はいかなる時でも意識され表明されるものとは限らないが、相手が抱いた自分に対する好ましい印象は、相手から自分にとって望ましい反応を引き出すことが出来ると考えている。そして彼は、大部分の人は他者から出来るだけ好意的に評価されたいと動機づけられており、それが得られるかどうか確信が持てない時に不安を経験すると述べている。この「他者からの評価に対する懸念」こそ他の不安の原因には見られない対人不安の特徴であり (Leary, 1983b)、この不安は実際にその場面に曝される前からそれを予期することによって既に始まっていると考えられる。

対人場面の中でも特にスピーチ場面は、自己呈示の必要性和それに伴う他者からの評価が予

測される場面として日常よく経験される場面であり、実際にパフォーマンスに際してしばしばそのような不安を感じるという報告は多い。McCroskey (1970, 1977) は、アメリカの大学生の少なくとも20%は強度の「コミュニケーション懸念 (communication apprehension)」を抱いており、一般の人ではさらに多くの割合で人前で話すことに伴って不安を経験するだろうと推測している。

## 研究1 Interaction and Audience Anxiety Scale (I-AA scale) の因子構造に関する検討

対人不安に関する研究は他の不安研究と同様に、場面の特性と個人特性の2つの側面からアプローチされている。場面の特性に焦点をおいた研究では相互作用の量や相手との関係性、聴衆の数、性別、専門性等が独立変数として操作され、そこで生じる不安感の程度との関係が検討されてきた。しかし、スピーチ不安を含めて対人不安が喚起されるような対人場面は、他者の反応の随伴性の高低から2つに分類することもまた可能であると考えられる。講演会等で見られるように主として行為者のパフォーマンスで場面が進行し、行為者は予め準備した行動の枠組みに従っていれば、その後の行動の修正をほとんど必要としない非随伴の場面と、面接場面や質疑応答時のように相手の反応に依存して展開し、相手の反応に応じて行動を修正していく可能性の高い随伴的場面である。Leary (1983b) は、ある対人場面で自己呈示をする時に実行可能な社会的計画や行動につながるスクリプトを持っていないと、自分の意図する望ましい印象が相手に与えられたかどうか確信が持てず、好ましくない認知や評価を相手から受けるのではないかという不安が高まると述べている。スクリプトとは、目的を達成するための一連の筋書き (Landau & Goldfried 1981) のことだが、このことは場面の新奇性による曖昧さやスクリプトの獲得の難しさが自己呈示の不確実性を高めていることを示唆している。従って、非随伴的な場面よりも随伴的な場面において自己呈示の不確実性に起因する不安の程度はより高いと考えられる。対人不安の研究において随伴性の観点から場面の特性を捉えた研究はあまりなされていないが、以上の点から対人場면을随伴性の次元で分類することは、対人不安を考える上で有意義であると考えられる。

個人の側の要因に焦点をおいた研究では、場面に対する反応の強度を規定する要因として自己意識や、評価懸念、シャイネスのような概念を用いて対人不安の説明を試みている。特に実験においてこれらの概念を操作しようとする場合には、測定したい要因がきちんと測定可能な妥当性及び信頼性の高い尺度が必要となる。

Leary (1983a) は、対人不安の研究で用いられている対人不安感を測定するための尺度のほとんどが主観的な不安感と行動を混同している点を指摘し、自己報告される純粋な不安感のみを調べる事が可能な尺度を作成した。この尺度は「Interaction and Audience Anxiousness Scale (I-AA scale)」といい、2つの下位尺度から構成されている。1つは「相互作用不安尺度 (interaction anxiousness)」で15項目、もう1つは「聴衆不安尺度 (audience anxiousness)」で12項目、計27項目からなる質問紙である。

### <目 的>

I-AA scale を日本語訳し、尺度構成が因子論的に妥当であるかどうか検討する。

## 〈方 法〉

〔被験者〕 一般教育科目である心理学系の講義を受講している大学生140名を対象に調査を行なった。

〔質問紙〕 I-AA scale (Leary, 1983) を日本語に訳し、平易な表現にした質問紙 (Appendix. 1-1参照) を用いた。評定は、「全くその傾向はない(1)」から「非常にあてはまる(5)」まで5件法で行なった。調査は集団アンケート法によって行われた。

〔分析〕 分析は、尺度の因子構造を調べるために各被験者ごとに尺度得点を算出した後、主因子分析法を用い、バリマックス回転を行なった。

## 〈結果と考察〉

I-AA scale の因子構造：2つの下位尺度が互いに独立した因子として存在するかどうか検討するために、全質問項目の合計得点を被験者ごとに算出し、主因子分析を行なった。さらにバリマックス回転を行なった結果、3因子が抽出された。因子分析の結果を Table. 1 に示す。抽出された3因子のうち第1因子は聴衆不安感に関する質問項目を多く含んでいたことから

Table. 1 日本語版 I-AA scale (27項目) における  
バリマックス回転後の因子負荷量

ITEM No.	FACTOR		
	1	2	3
1.	0.090	-0.290	0.596
2.	0.065	0.682	-0.187
3.	0.167	-0.171	0.729
4.	0.135	-0.256	0.635
5.	0.106	-0.164	0.789
6.	0.232	-0.020	0.438
7.	0.209	-0.221	0.556
8.	0.007	0.511	-0.268
9.	0.184	-0.365	0.627
10.	0.265	0.034	0.329
11.	0.475	0.036	0.394
12.	0.404	-0.060	0.550
13.	0.448	-0.362	0.372
14.	0.646	-0.235	0.069
15.	-0.285	0.507	-0.303
16.	0.597	-0.129	0.246
17.	0.577	-0.106	0.006
18.	-0.177	0.821	-0.069
19.	0.648	-0.105	0.194
20.	0.659	-0.095	0.028
21.	0.448	-0.143	0.433
22.	-0.360	0.566	-0.098
23.	0.294	-0.576	0.134
24.	0.433	-0.193	0.198
25.	0.661	-0.098	0.121
26.	0.480	0.014	0.338
27.	-0.411	0.308	-0.131
固有値	4.382	3.166	4.294

Table. 2 日本語版 I-AA scale (21項目)  
におけるバリマックス回転後の  
因子負荷量 (N=140)

ITEM No.	FACTOR	
	1	2
16.	0.657	-0.120
18.	0.737	-0.180
19.	0.661	-0.167
20.	0.802	-0.115
21.	0.426	-0.210
22.	0.588	-0.227
24.	0.694	-0.217
25.	0.301	-0.247
26.	0.368	-0.453
27.	0.589	-0.431
1.	0.472	-0.464
2.	0.131	-0.668
4.	0.239	-0.634
5.	0.042	-0.559
7.	0.220	-0.639
8.	0.276	-0.675
9.	0.459	-0.433
12.	0.234	-0.418
13.	0.109	-0.682
14.	0.298	-0.480
15.	-0.192	0.453
固有値	4.463	4.188

「聴衆不安因子」、第3因子の因子負荷量が高かった質問項目は相互作用不安感に関するものが主であったことから「相互作用不安因子」と考えられる。2つの下位尺度の共通概念である対人不安因子と考えられる因子は抽出できなかった。第2因子の因子負荷量の高い項目（相互作用不安尺度 No. 3, 6, 10, 11 及び聴衆不安尺度 No. 17, 23 計6項目）を検討したところ、他の質問項目に比べて不安を感じるとされる場面の記述が曖昧で個人の全般的な気質傾向を尋ねる度合いが強く、対人場面という特定の場面で経験される主観的な不安の測定には不適当であると考えられる。

次に、第2因子の因子負荷量の高かった6項目を除いた21項目について再分析を行なった。その結果、2因子が抽出された。21項目の因子分析の結果を Table. 2 に示す。第1因子は「聴衆不安因子」、第2因子は「相互作用不安因子」と考えられる。なお尺度の簡便化のため各因子負荷量と項目内容を吟味して聴衆不安に関する項目を7項目・相互作用不安の項目を7項目選出し、計14項目からなる日本語版対人不安感尺度を再構成した (Table. 3; Appendix. 1-2)。

以上の結果から、下位尺度を問題にせず上位概念である対人不安感の測定を行なう場合には Leary の27項目をすべて用いることに問題はないが、「聴衆不安感」と「相互作用不安感」の弁別が測定に必要な場合には、27項目中から不適当な項目を除いて測定に用いることが望ましいと考えられる。本研究で因子論的に選択された14項目からなる修正版対人不安感尺度はこの点において有効な測定尺度である。さらにデータを増やして安定した尺度化を行ないたい。

Table. 3 修正版対人不安感尺度 (14項目) におけるバリマックス回転後の因子負荷量 (N=140)

ITEM No.	FACTOR	
	1	2
1.	<b>0.654</b>	0.138
2.	<b>0.754</b>	0.188
3.	<b>0.664</b>	0.177
4.	<b>0.807</b>	0.118
5.	<b>0.414</b>	0.220
6.	<b>0.573</b>	0.211
7.	<b>0.683</b>	0.205
8.	0.149	<b>0.610</b>
9.	0.243	<b>0.652</b>
10.	0.055	<b>0.554</b>
11.	0.217	<b>0.655</b>
12.	0.273	<b>0.690</b>
13.	0.121	<b>0.693</b>
14.	0.291	<b>0.435</b>
固有値	3.361	2.914

## 研究2 修正版対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する考察

### <目的>

研究1において構成された「対人不安感尺度」の信頼性と妥当性を検討し、今後の対人不安研究における個人特性の指標としての有効性を考察する。

### <方法>

[被験者] 一般教育科目である心理学系の講義を受講している大学生278名を対象に調査を行なった。278名のうち回答に欠損のあった13名を除く265名を分析の対象とした。

[質問紙] 研究1によって構成された14項目からなる「対人不安感尺度 (Appendix. 1-2 参

照)」を用いた。調査は集団アンケート法によって行われ、「全くその傾向はない(1)」から「非常にあてはまる(5)」まで5件法で評定された。

[分析] 調査結果の分析では、再構成した質問紙の妥当性を検討するために主因子分析・バリマックス回転を行ない「対人不安感尺度」の因子構造を調べるとともに、GP分析法による項目分析を行なった。また、信頼性を検討するためにクロンバックの信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出した。

### ＜結果と考察＞

(1) 尺度得点の分布：再構成された質問紙により調査を行なった結果、対人不安感尺度得点およびその下位尺度得点の平均および標準偏差は Table. 4 のとおりであった。

Table. 4 修正版対人不安感尺度得点及び下位尺度得点の平均値

	対人不安感尺度	聴衆不安感尺度	相互作用不安感尺度
平均 (SD)	36.8 (10.62)	19.4 (6.18)	17.4 (5.71)

また、下位尺度得点の分布はそれぞれ正規分布していることが統計的に確認され (Fig. 1 参照)、各項目の得点の分布もほぼ正規分布していた。

(2) 因子論的妥当性の検討：主因子解を求め、バリマックス回転を行なった。その結果、2因子が抽出され、項目と照らし合わせてそれぞれ聴衆不安・相互作用不安の因子であることが確認された (Table. 5 参照)。この結果は研究1の場合と同様であり、尺度の持つ因子構造はかなり安定していると考えられる。聴衆不安因子と相互作用不安因子との相関はほとんどなく ( $r = -.09$ )、聴衆不安尺度と相互作用不安尺度との間の尺度得点の相関は  $r = .46$  であった。

さらに、質問項目の妥当性を検討するために項目分析を行なった。得点の分布の正規性が確認されたので、聴衆不安尺度・相互作用不安尺度の両尺度得点の上位25%・下位25%を高得点群 ( $N=66$ )・低得点群 ( $N=66$ ) とし、項目得点は1・2点を低得点、4・5点を高得点として、それぞれの尺度得点と項目得点との連関の程度を調べた。それぞれの尺度の項目分析の結果を Table. 6 に示す。項目分析の結果、 $\phi = .80$  以上を示した項目が聴衆不安尺度において7項目中6項目、相互作用不安尺度において7項目中5項目あり、残りの項目についても連関係数は  $\phi = .60$  以上を示したことから各尺度得点とそれに対応する項目の得点には強い連関があることが明らかになった。

以上のことから、対人不安感尺度についてこの質問紙の因子論的妥当性および項目の妥当性の高いことが確認された。

(3) 信頼性の検討：項目間の信頼性は、聴衆不安に関する項目の信頼性が  $\alpha = .85$  であり、相互作用不安の項目の信頼性は  $\alpha = .82$  であった。Leary (1983a) によると、I-AA scale は全項目間の信頼性 ( $\alpha = .90$ ) および8週間おいた再テスト法による信頼性 ( $\alpha = .80$  以上) は高い値を示している。

2つの下位尺度の因子得点間に相関がなかったことからこの質問紙によって「相互作用不安感」と「聴衆不安感」の弁別が可能であるといえる。また、Leary (1983a) によれば I-AA scale における2つの下位尺度の相関係数は  $r = .44$  であった。本研究でも2つの下位尺度得点間の相関が  $r = .46$  であることから「対人不安」を上位概念と考えることができ、以上の結果を踏まえて、この対人不安感尺度が主観的な不安感を測定することが可能な十分に安定した尺度であることが確認できたといえる。

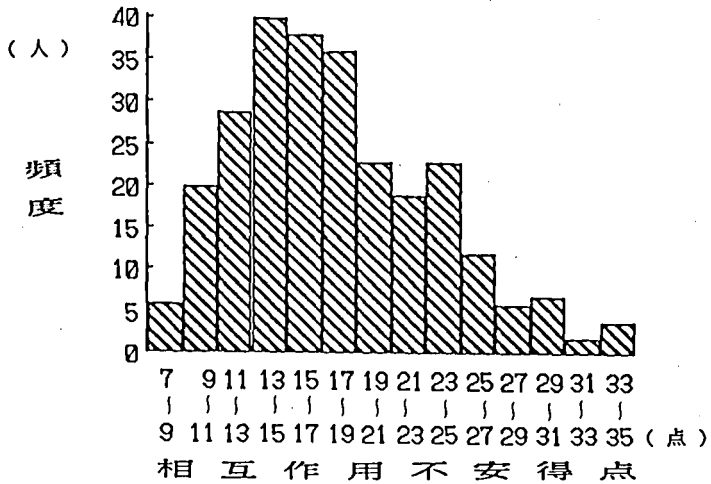
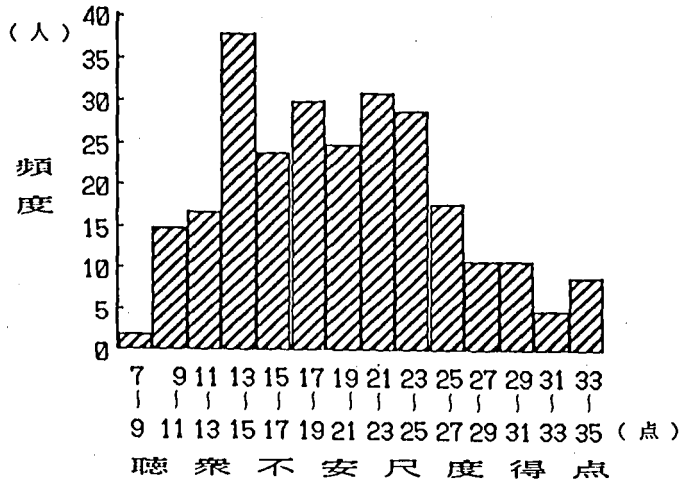


Fig. 1 下位尺度得点の分布

質問項目の内容が、特にコミュニケーション場面に対する不安感の程度を尋ねたものとみなすことが可能なので、対人不安の中でもスピーチ不安の測定に限定して用いても差し支えないと思われる。「相互作用不安」とは他者の反応の随伴性の高い場面で生起するものであり、一方「聴衆不安」では随伴性の低い場面が設定されている。従ってこの質問紙は、場面の特性の違い—すなわち随伴性の高低—が個人の不安反応にどう影響するのかを予測可能な尺度であると考えられる。スピーチ不安の程度を場面の特性から分類して検討を加えようとする研究の場合には、この質問紙は非常に有効であるといえる。

Table. 5 修正版対人不安感尺度における  
バリマックス回転後の因子負荷  
量 (N=265)

ITEM No.	FACTOR	
	1	2
1.	0.726	-0.203
2.	0.825	-0.233
3.	0.701	-0.222
4.	0.715	-0.311
5.	0.363	-0.355
6.	0.522	-0.397
7.	0.704	-0.203
8.	0.247	-0.532
9.	0.286	-0.585
10.	0.157	-0.614
11.	0.302	-0.627
12.	0.203	-0.672
13.	0.165	-0.633
14.	0.247	-0.674
固有値	3.662	3.665

Table. 6(a) 修正版対人不安感尺度の項  
目分析の結果 (N=265)  
〈聴衆不安感尺度〉

AA-scale score	Item score			$\phi$
	high	low		
NO. 1 HIGH	45	6		.895
LOW	0	59		
NO. 2 HIGH	65	0		1.0
LOW	0	57		
NO. 3 HIGH	47	2		.964
LOW	0	62		
NO. 4 HIGH	52	6		.905
LOW	0	64		
NO. 5 HIGH	28	16		.658
LOW	2	58		
NO. 6 HIGH	46	6		.839
LOW	3	57		
NO. 7 HIGH	52	7		.892
LOW	0	65		

Table. 6(b) 修正版対人不安感尺度の項  
目分析の結果 (N=265)  
〈相互作用不安感尺度〉

IA-scale score	Item score			$\phi$
	high	low		
NO. 8 HIGH	52	4		.824
LOW	6	51		
NO. 9 HIGH	23	21		.625
LOW	0	62		
NO. 10 HIGH	26	12		.760
LOW	0	65		
NO. 11 HIGH	29	8		.834
LOW	0	63		
NO. 12 HIGH	40	3		.942
LOW	0	63		
NO. 13 HIGH	47	2		.964
LOW	0	62		
NO. 14 HIGH	40	7		.870
LOW	0	56		

Appendix 1-1

学生番号

名前

(男・女)

以下の各項目について、あなたは自分にどの程度あてはまると思いますか。  
最も気持ちに近いところに○をつけてください。

相互作用不安尺度(Interactional Anxiety Scale)

	全 傾	少 あ	や あ	か あ	非 あ
	向	そ	て	は	て
	は	の	は	は	は
	な	ま	ま	ま	ま
	い	る	る	る	る
1 私はちょっとした集まりでさえも、しばしば引っ込み思案になる。	1	-	2	-	3
2 私は知らない人の集まりの中にいると、いつも居心地が悪い。	1	-	2	-	3
3 私は異性の友人に対して、いつも気楽に話せる。	1	-	2	-	3
4 私は先生や上司と話をしなければならぬと、そのことが負担になる。	1	-	2	-	3
5 私はパーティなどで、しばしば不安になったり不快な気持ちになったりする。	1	-	2	-	3
6 私はどちらかといえば、社交的な方だ。	1	-	2	-	3
7 私は同性の人でも、あまり親しくない人と話す時々緊張する。	1	-	2	-	3
8 私がもし仕事で人と会わなければならぬとしたら、そのことがかなり気がかりとなる。	1	-	2	-	3
9 私は人と付き合っていく上で、もっと自信が持てるようになりたい。	1	-	2	-	3
10 私は対人関係がそれほど苦にならない。	1	-	2	-	3
11 一般的に私は内気な方だ。	1	-	2	-	3
12 私は魅力的な異性に話す時、しばしば臆病になる。	1	-	2	-	3
13 私はあまり親しくない人に電話をかける時、そのことが苦になる。	1	-	2	-	3
14 私は偉い人に話しかける時、いつも緊張する。	1	-	2	-	3
15 私は知らない人の中にも、たいていリラックスできる。	1	-	2	-	3

聴衆不安尺度(Audience Anxiety Scale)

16 私は人前で話をしている間中、ずっと緊張している。	1	-	2	-	3
17 私は人前で話をするのが好きだ。	1	-	2	-	3
18 私は人前に出て行かなければならない時、緊張する方だ。	1	-	2	-	3
19 私がもし、たくさんの聴衆の前に出て行かなければならぬとしたら、考えただけでも恐い。	1	-	2	-	3
20 私は人前で話したり、何かをしなければならぬ時、そわそわして落ち着かなくなる。	1	-	2	-	3
21 カメラで写されることが分かると、緊張してぎこちなくなる。	1	-	2	-	3
22 私は人前で話をする時、自分の考えがまとまらなくなってしまう。	1	-	2	-	3
23 事前にリハーサルさえしておけば、人前で話すのは苦にならない。	1	-	2	-	3
24 私は人前で話すことがこんなに苦にならなければいいのと思う。	1	-	2	-	3
25 もし私が音楽家なら、おそらくコンサートの前にはあがってしまうだろう。	1	-	2	-	3
26 私は他人の前で話をする時、自分が笑い者になるのではないかと不安になる。	1	-	2	-	3
27 私は学校や職場で自分の意見を述べなければならぬ時、臆病になってしまう。	1	-	2	-	3

どうもありがとうございました



## Appendix 1-2

学生番号

名前

(男・女)

以下の各項目について、あなたは自分にどの程度あてはまると思われますか。  
最も気持ちに近いところに○をつけてください。

全	少	や	か	非
傾	あ	あ	あ	あ
向	そ	て	て	て
は	は	は	は	は
な	ま	ま	ま	ま
い	る	る	る	る

聴衆不安尺度 (Audience Anxiety Scale)

- |   |   |               |
|---|---|---------------|
| 1 | 私は人前で話をしている間中、ずっと緊張している。                  | 1--2--3--4--5 |
| 2 | 私は人前に出て行かなければならない時、緊張する方だ。                | 1--2--3--4--5 |
| 3 | 私もし、たくさんの聴衆の前に出て行かなければならないとしたら、考えただけでも恐い。 | 1--2--3--4--5 |
| 4 | 私は人前で話したり、何かをしなればならない時、そわそわして落ち着かなくなる。    | 1--2--3--4--5 |
| 5 | カメラで写されることが分かると、緊張してぎこちなくなる。              | 1--2--3--4--5 |
| 6 | 私は人前で話をする時、自分の考えがまとまらなくなってしまう。            | 1--2--3--4--5 |
| 7 | 私は人前で話すことがこんなに苦にならなければいいのにと思う。            | 1--2--3--4--5 |

相互作用不安尺度 (Interactional Audience Anxiety)

- |    |  |               |
|----|--|---------------|
| 8  | 私は知らない人の集まりの中にいると、いつも居心地が悪い。           | 1--2--3--4--5 |
| 9  | 私は先生や上司と話をしなければならぬと、そのことが負担になる。        | 1--2--3--4--5 |
| 10 | 私はパーティなどで、しばしば不安になったり不快な気持ちになったりする。    | 1--2--3--4--5 |
| 11 | 私は同性の人でも、あまり親しくない人と話す時時々緊張する。          | 1--2--3--4--5 |
| 12 | 私もし仕事で人と会わなければならぬとしたら、そのことがかなり気がかりとなる。 | 1--2--3--4--5 |
| 13 | 私はあまり親しくない人に電話をかける時、そのことが苦になる。         | 1--2--3--4--5 |
| 14 | 私は偉い人に話しかける時、いつも緊張する。                  | 1--2--3--4--5 |

どうもありがとうございました

## 引用文献

- Landau, R. J. & Goldfried, M. R. The assessment of schemata. A unifying framework for cognitive, behavioral, and traditional assessment. In P. C. Kendall & S. D. Hollon (Ed.), Assessment strategies for cognitive-behavioral interventions. New York: Academic Press, 1981.
- Leary, M. R. Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, 1983, 47, 66-75 (a)
- Leary, M. R. Understanding social anxiety. Beverly Hills, California: Sage Publications, 1983 (『対人不安』 生和秀敏監訳, 北大路書房 1990) (b)
- McCroskey, J. C. Measures of communication-bound anxiety. *Speech Monographs*, 1970, 37, 269-277.
- McCroskey, J. C. Oral communication apprehension: A summary or recent theory and research. *Human Communication Research*, 1977, 4, 78-96
- Schlenker, B. R. & Leary, M. R. Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 1982, 92, 641-669